

研究の棊

日本古建築研究の棊 (第十四回)

工學博士 天 沼 俊 一

第二十四 疏 瓦 (上)

例の『三才圖會』には

疏瓦 ツツミカハラ 和名都々美加和良 今云巴瓦 トモエ

とあるが、『言海』にはつ、つみかほらに、

疏瓦〔棟ヨリ軒ニ至ル堤ノ如クナレバイフ〕、牡 ヲ

瓦 カハラ、筒瓦ニ同ジ

といふ説明をつけ、ともゑかはらの條には、

巴瓦、牡瓦ノ端ニ底アリテ鼓ノ面ニ似テ、巴ノ

紋ナドアルモノ、簷ノ端ニ用キル、瓦當、花頭

瓦

とあるし、『工業字解』には、

疏瓦 ツツミカハラ 音梳蛙上聲 ソクワ 〔和名抄〕——ハつゝみかは

らト訓ス古言ナリ今俗ニ軒巴瓦トイフ丸瓦ノ一

端ニ平圓盤ヲ造リ付テ其面ニ三ツ巴ノ飾リヲ盛

リ上ゲタルモノナリ……

も一つ『日本建築字彙』には、

「疏瓦」トモ稱ス、丸瓦ノ中最モ軒近クニアル

モノニテ其鏡ニ巴文アル故カク稱ス今ハ巴文ナ

キモノヲモ巴瓦ト稱スルコト恰モ鬼面ナキモノ

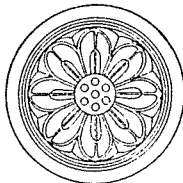
ヲモ鬼瓦トイフガ如シ故ニ無地巴瓦ナル語アル

ニ至レリ……

●●●第七十八圖●●●

疎凡文様二十二種

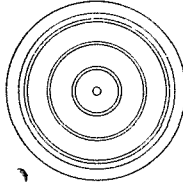
◎大正十叁年(1924)九月十叁日◎



大和・熊疑寺



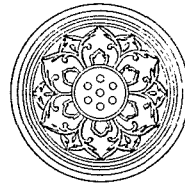
大和・法隆寺



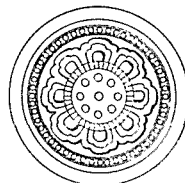
京都・法観寺



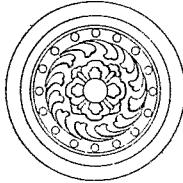
大和・廢地光寺



下總・國分寺



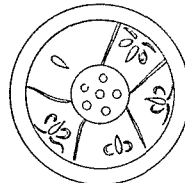
和泉・禪寂寺



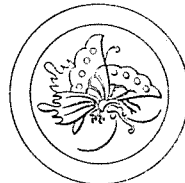
山城・石清水八幡宮



豊後・天念寺



京都・教王護國寺



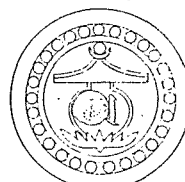
淡路・成山城



下野・智光寺



河内・廢西琳寺



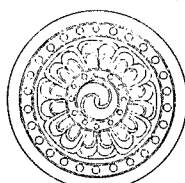
京都・岡崎公園出土



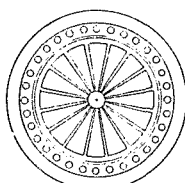
京都・岡崎公園出土



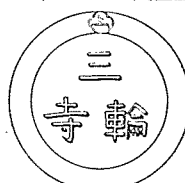
京都・廢法成寺



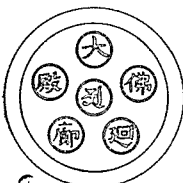
奈良・哭福寺



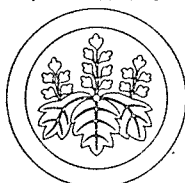
京都府・世郡字冷町出土



大和・廢大御輪寺



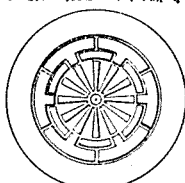
奈良・東大寺



京都・阿彌陀峰



出所未詳(但大和)



播磨・姫路城

未だこれ等の他、いろいろの本にいろいろの定義が下してあることと思ふが、もう此の位で澤山であらう。右の内言海丈けが圓瓦を疏瓦にあてゝゐる丈けで、他は皆所謂『巴瓦』の事を指してゐるのである。

私は鬼瓦の場合に、鬼面がついてゐないでも他に適當な名稱がないからとの理由で、矢張鬼瓦と呼んでおいた、併し今の場合巴瓦と呼びないでも疏瓦といふ名がある、而も巴紋をつけ出したのは、遺物からいふと平安時代以降の事であり、其以前は蓮花紋であつた。後にもう少し詳しく記すが、巴紋の他に寶相花紋・菊花紋(此れ等二つは何れしたとも考へられる)・漢字・梵字等、種々な文様をつけ出す様になつたが、蓮花紋はごうも、宗教建築の臭ひがするけれども、巴紋だと神社でも寺院でも宮室でも邸宅でも、所有種類の建築にむくので、忽ち瓦當文様界を風靡し獨り全盛を極め、且つ日本人

の趣味に合し、其上建築の中心が非宗教建築に移つてからでも、少しも差支なく用ひられるといふ様な種々な原因から、おそろしく命脈が永い、そんな邊から便宜巴瓦と呼び出したのであらう。私は今迄いつも疏瓦の文字を用ひて來た、だから此處でも同じく此の字を用ひたのである。

疏瓦のみではなく、後に述べる『花瓦』でも、今日迄に發見報告されてゐるの丈けでも、文様の種類は無數・無慮數千・千差萬別・千變萬化等、何でも無暗に多いといふ様な形容詞をもつて來なければ間に合はぬ程多いのである、だから夫れ等について丈けでも一々説明をする段になると、全く以て容易なことではない、夫れどころではなく、此れ等のうちで代表的のもの丈けとつても中々大變で、到底研究の棗の一部には書き切れぬ、これ丈けで可なり大きな一冊の本が出来る、だから今こゝでは、古來疏瓦瓦當の文様として最も多く用

ひられた蓮花紋と、今でも用ひられつゝある巴紋とにつき、手元にある若干の例を圖版として掲げ其變遷を一通り説明する事にした、これが充分呑み込めれば、あとは其應用で大概のことは分る、此れも亦墓股本鼻懸魚飾金具等と同じ様に最も判り易きものゝ一つである。兎に角實物に就いて研究することが最も肝要である。

文様等といふものは突然に出来るものではなく、追々と發達し徐々に變化していくものである、瓦の夫れも亦然りである。各種の繪様線形の如き

は、多いといつても大概数が知れてゐるが、瓦のは何といつても種類が多い、だから瓦一つ一つ皆文様は變つてゐても、靜かに蔓を手繰つていくと其原はちきに判る、さうすると自然時代も判つて来る、自然面白くなり益々研究する様になるのである。

先づ左に古瓦に現はれたる文様と時代の關係とを記してみやう、勿論大體であるから除外例はあると思つて戴き度い(第七十)。

	文様の種類	時代	備考
一	蓮花紋(單・複瓣)	飛鳥以降	江戸迄續いてはゐるが、奈良が絶頂であさは下り坂、鎌倉以後は全く駄目になる。飛鳥には瓣面に忍冬をつけたのがある。
二	重圓紋	飛鳥以降	主として飛鳥・奈良時代、平安迄を限り以降跡を絶つた様である。再び江戸時代(中期以後)に出現するが、其間は判らぬ。
三	獸面	奈良	其例極めて稀れである。
四	寶相花紋	奈良以降	純なのは室町迄の様で、其以後は墮落變形して了つた様である。
五	佛像	平安	今日迄に知られたる六七種は何れも平安時代のものゝみこ認めらる獸面の次に珍らしいものである。

六	昆蟲	平	安	鱗翅目の昆蟲(蛾か)を放射形に瓦當につけ、中心は、七子を含める子房を以て飾つたもの。東寺出土の唯一例あるのみ。
七	巴紋(二つ巴・三つ巴)	平安	以降	一つ巴は室町時代に實例あるのみ、二つ巴は平安、三つ巴は各時代にある。鎌倉には間々巴紋を陰刻したのがある。
八	寶塔	平安	以降	室町以降はごうが判らぬ。主として平安・鎌倉の兩時代丈けらしい。
九	五輪塔	平安	以降	同上
一〇	梵字	平安	以降	「アク」字を大きく瓦當に出したものの、此れに相當する花瓦には五 六の種子を現はしてある。鎌倉以後は彌陀の種子等。
一一	復合紋	平安	以降	多く蓮花紋で、子房内蓮實の代りに巴紋を入れたるもの。鎌倉以後 は蓮實の代りに梵字又は漢字をかいたのがある。
一二	菊花紋	鎌倉	以降	多くは陰又は陽刻の菊花丈けで、其外縁との間に珠紋のある例は稀 れである。
一三	漢字	鎌倉	以降	寺名又は建造物名——法隆寺・大安寺塔・東大寺三面僧坊云云等—— 或は寺名の頭字一字——法華滅罪寺の「法」字等。
一四	桐	桃山	以降	主として桃山時代、江戸にもあらう。
一五	橘	桃山	以降	建築彫刻には早く鎌倉末期に既に出現してゐる、勿論室町時代にも 實例はある、併し瓦當の文様として桃山かららしく思ふ。
一六	鳳蝶	桃山・江戸		何れも飛翔せる状態を寫したもので割合に寫生的である。標本の様 にしてつけたのは一つもない。
一七	紋章	桃山	以降	桃山に始まつた様である。江戸以降盛に用ひらる。
一八	人面	?		
一九	其他			何れにも當嵌らぬもの、例へば唐招提寺藏廢超昇寺瓦の如きものを これに入れておく。現代にも可なり實例がある。

大體こんなものだらうと思ふがまだあるかも知れぬ、いづれ追々訂正増補をするつもりである。此表は大體の説明をする爲めに備考欄を設けて書きつけたが、多少見にくくもある。だから次に一目瞭然の表にしてみる。表中實線は確實なる出現期間を、破線は想像出現期を示したのである。

此の内、桐花や橘實は紋章の中へ入れていゝかも知れぬ、桃山以降出現した鳳蝶亦然りであらうが、こゝでは別にしてお

紋章	橘實	桐花	漢字	菊花	復合	梵字	五輪塔	寶塔	巴	昆虫	佛像	寶相花	獸面	重圓	蓮花	文様時代
														⋮		飛鳥
																奈良
																平安
																鎌倉
																室町
																桃山
																江戸
																現代

いた。

表でみると、例へば昆虫に出現期がある如く、どの文様はどの時代からどの時代迄、或はもう少し詳しくいふならば、どの時代のいつ頃から、どの時代のいつ頃迄といふ風に、趣味の變化や其他時代の變遷等、種々の原因から自然流行の期間が限られてゐる事が判る。

飛鳥・奈良時代に漢字をかいたのや、桐花をつけた瓦はなく、桃山・江戸時代の重弧紋の瓦が見出せないのは、冬の寒い日

に蟬や蜻蛉が居ないのと同じである。だから文様のある瓦があつたら、夫れを此の表に當て儼めてみて先づ第一に略ぼ時代をきめるといふ、さうすると如何なる初學者でも大凡のどころへ來る、金的は射抜けなくとも大的の縁位には當る事請合である。

然らば其原即ち標準は如何にして決めるか、一々標準にすべき瓦に製造の年月日でも刻みつけてない限り、根本が頗るあやしい事になるが、夫れは少しも心配するに當らぬ、曩にも記した通り、文様は何れも決して突然に出來るものではなく、大體に於いて緩慢に變化していく、其上、瓦のだからといつて特別のものではなく、何れにも共通である、だから他の確實なものに比較してきめるのであるから、多少の誤りは止むを得ぬが、其原が怪しい事はないのである。夫れを疑ふなら、今日迄十三回に渡つて記載したことは皆怪しいもの

になつて了ふ。時代の約束はそんな不確實なものではないのである。

## 分 類

第七十八圖に掲げた文様は極く少數であるから、あれ丈けの説明では或は多少了解しにくき點もあるかも知れぬにより、左に各時代の蓮花紋及び巴紋を分類し、例を擧げて研究に便ならしめておく。此れは圖版の説明より前に必要な事であらう。脱漏も勿論澤山あらうが、片手間の仕事ではさう最初から完全とは行きかねる、だから夫れ等は好機を得次第何とかするつもりである。

飛鳥時代、は殆んど蓮花紋に限るといへる、其蓮花に單瓣と複瓣とある、單瓣とは各瓣が明らかに一瓣より成るものを指し、複瓣とは各瓣が其中央を縦走せる線によりて二分され、各區分内に長卵形の小隆起を有するものを指すのである。複瓣

は『八重』の意味ではない事を斷つておく(以下此れに依る)

單 瓣(第七十)。

一、瓣の遊離端は鈍角をなし其角點の小球著明なり(飛鳥寺・奥山久米寺)

二、寫生的。

(イ) なり(法隆寺・和田廢寺・奥山久米寺・京都法觀寺・八阪塔)

(ロ) にして遊離端に小球あり(法隆寺)

三、瓣の遊離端は内方に『莢』を形作り(法隆寺)

四、瓣の遊離端圓形(即ち瓣は卵形なり)(法起寺)

五、同上にして圓形をなせる部分は略新月形に隆起し、子房内には中心を通過せる十字形の線ありて此れを四象限に分ち、各象限内に一個づゝの蓮實を含む(輕寺)

六、瓣は卵形又は長卵形にして、瓣面中央縦線全部隆起して先端に達し、瓣間には一個づゝの珠紋を配置す(豐浦寺・奥山久米寺)

七、瓣の周邊に輪廓あり、遊離端は反轉の狀を示し、且つ中央縦線に沿ひて長卵形の小隆起あり(山田寺・熊凝寺・大和吉備寺)

八、瓣は潤大にして其面に忍冬又は類似の文様を附せり(法隆寺・河内野中寺)

右何れも子房小さく六乃至九子——普通七子——を含む、子房面は平たいのもあるが、また圓く膨らんだ丁度凸レンズの様な形をしたものもある。輪廓は多數は巾狭く面は無地であるが、時には三四條の線を刻したり、また波紋を刻みつけたりしたものもある。

複 瓣(第八十)。

一、各瓣面に二個づゝの小隆起あり。

(イ) 周縁に波紋を附す(法隆寺・熊凝寺・長林寺・法起寺)

(ロ) 同上にして周縁の内側に珠紋帯あり其珠紋は極めて小なり(中宮)

此の種では子房何れも大きく、内に十七乃至二



十五子を含む、従て瓣は短大である。單瓣の、様に子房丈け膨んだのは見當らぬが、瓦當全體として中高なのはある。各瓣は縦線で明らかに左右に二分せられてゐるのと、さうでないのとある。も一つ周縁の波紋は細い線から成つてゐるのと、三角型に凹ましたのとある。

奈良時代前期 になると、前代と反對に複瓣の種類が増してくる、全體として批評すると單瓣は大分拙くなり、複瓣は漸く優秀になつてきたのである。

單 瓣 (第七十)。

一、瓣の遊離端は鈍角をなし角點に小球あり、

子房特に小なり (中匠寺)。

二、寫生的にして

(イ) 六瓣 (熊凝寺) 又は八瓣 (尾張・願興寺)。

(ロ) 周縁の内側に波紋帯あり (興福寺・武藏影向寺)。

(ハ) 遊離端は反轉の状を示し、若しくは示さ

す、中央縦線に沿ひ隆起を有す (尾張報恩寺・上野上植木)。

(廢寺・下野下神主・廢寺・武藏影向寺)。

(ニ) 各瓣に棍棒狀の二條の小隆起あり、波紋帯あり (法隆寺)。

三、細長にして縦線に沿ひて凹く、瓣二重、八

瓣は前に八瓣は後ろに位置し、瓣間に珠紋一個づゝを配す、子房割合に大にして膨みを有す (出所未詳、但し大和國)。

四、卵形にして輪廓あり、周縁との間に珠紋帯あり (出所未詳、但し大和國)。

五、瓣形卵舌飾 (Egg & Tongue) の如し (奥山久米寺)。

複 瓣 (第八十)。

一、各瓣面に二個づゝの小隆起あり

(イ) 周縁の内側に珠紋帯ありて

(1) 周縁は無地なり (元藥師寺・藤原宮・巨勢寺・吉備寺)。

(2) 周縁に忍冬より脱化せし唐草あるもの (松尾寺)。

(3) 周縁の斜面に波紋あり (巨勢寺・檜隈寺・元藥師寺・加守廢寺等)

(ロ) 周縁の内側に波紋帯あり (法隆寺)

(ハ) 周縁の内側に珠紋及唐草紋帯あり (出所未詳但和し大)

(ニ) 周縁との間に何もなく

(1) 周縁は無地なり (元興寺・輕寺・河内・大平寺・近江駒坂寺等)

(2) 周縁の斜面に珠紋あり (大官)

(3) 周縁の斜面に波紋あり (葛城寺・岡寺・當麻寺等)

(4) 子房内の蓮實に輪廓あり (本藥師寺・弘福寺・東塔・石川寺・檜隈寺・山城高麗寺・同國分寺)

(5) 周縁の斜面に一種の文様を並列し、且つ子房内の蓮實に輪廓あり (寺紀)

二、蓮花瓣に輪廓あり (藥師寺)

三、周縁の斜面に散模様あり、子房内の蓮實少數なり (山城綴喜郡三山木村大字江津出土)

右の内、單瓣の三及び複瓣の一(ニ)の(4)の諸例中

で石川寺・弘福寺東塔・檜隈寺の等は、瓣に力が籠り形もよく頗る優秀の作である。

奈良時代後期、では單瓣複瓣共、前期の如く相並びて存してゐるが、前者は最早下り坂となり、後者は極端の發達を遂げたが、末期になると單瓣同様の運命に陥つて了つた。

單瓣 (第八圖)

一、瓣形杏仁 (杏に限らず梅・桃等の種子にも似てゐるが、薔薇科植物の仁とした方がいゝかも知れぬ) の如く

(イ) 周縁との間に何もなし (遠江國分寺・若代郡山出土)

(ロ) 周縁との間に珠紋帯あり (平城宮・伊勢及筑後國分寺)

(ハ) 同上にして周縁の斜面に波紋あり (平城宮・下野藥師寺)

(ニ) 同上にして唐草あり (額安寺)

二、瓣は密接し其遊離端圓く厚く、瓣面の隆起大きく瓣間の線著し (陸奥國分寺・陸前多賀城)

三、六瓣にして瓣に廣狭なく瓣間に一つづゝの

珠紋を置き、子房は少しく大なる一個の珠紋にて現はし、周縁に三條の同心圓を描く(三河北野寺廢)

四、子房割合に小さく瓣は細長にして菊花――

(或は寧ろ菊科植物といふ方がいゝかも知れぬ)――の如し(平城宮二種・秋篠寺)

五、子房割合に大きく従て瓣は長からざるも前

種同様菊科植物の花の如し(大安寺・法花寺・平城宮等)

六、瓣は細長なるも中に廣狹の差少なく、其遊

離端内方に茨を作り(即ち反轉の意を示し)、瓣上の隆起

は輪廓のみ著しく、周縁上及子房内には小珠

紋を疎に配置せり(伊勢逢鹿瀬寺)

複 瓣(第八十・二圖)

一、周縁の内側に珠紋帯あるも

(イ) 周縁は無地なり(興福寺・近江紫香樂宮・淡路國分寺)

(ロ) 周縁斜面に波紋あり(東大寺戒壇院・大安寺・唐招提寺・阿波國分寺等)

二、周縁の内側に唐草紋帯あり、珠紋帯なし

(イ) 周縁は無地なり(下野國分寺)

(ロ) 周縁の斜面に波紋あり(但し大和出所未詳)

(ハ) 周縁の斜面に散し模様あり(山城綴臺郡三山木村出土)

(ニ) 周縁の上及び其の斜面に散し模様あり(上同)

三、蓮花紋と周縁との間に二重の半圓と珠紋と

を交互に現はせる一帯あり、周縁は巾狭くし

て無地(豐前寺彌勒寺)

複瓣の方は分類をすると先づ此の位で、従て數

もさう澤山ない様な感がするが、其實當代のは前

後期共随分澤山ある。例へば蓮花瓣が大きかつた

り小さかつたり、輪廓があつたり無かつたり、其

ある場合に一重であつたり二重であつたり、瓣上


隆起の形によりて一々見たところが變る等、事實

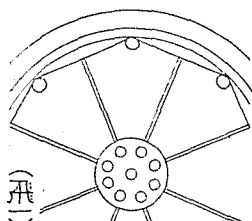
無數と言へるのである。當代寶相花文様には非常

に立派なのがある(備中吉備寺)

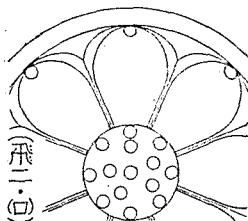
平安時代前期 に入ると漸々墮落の傾向がひど

第七十九圖  
飛鳥奈良時代  
單瓣蓮華紋  
疏凡十四種

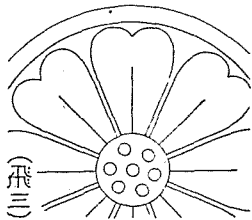
不許複製 



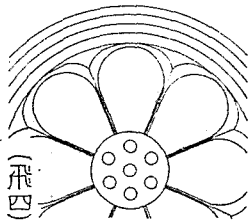
(飛一)  
大和・興山久半寺



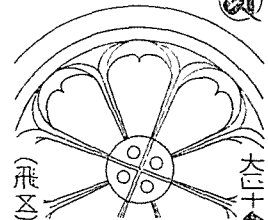
(飛二)  
大和・沓隆寺



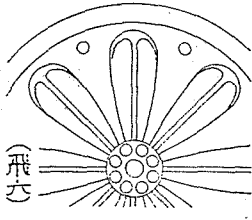
(飛三)  
大和・沓隆寺



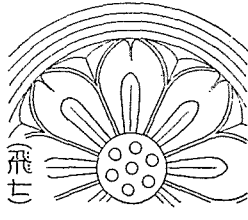
(飛四)  
大和・沓起寺



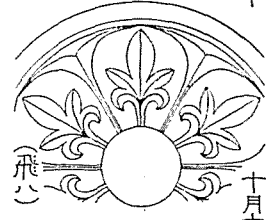
(飛五)  
大和・輕寺  
大正十叁年



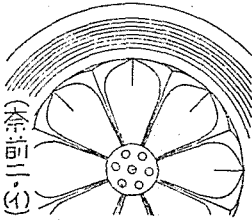
(飛六)  
大和・豐浦寺



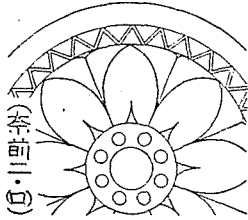
(飛七)  
大和・山田寺



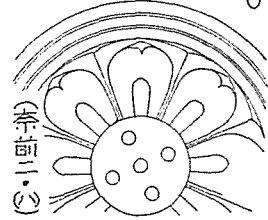
(飛八)  
大和・沓隆寺  
十月十日



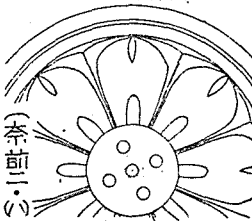
(奈前二)  
尾張・願興寺



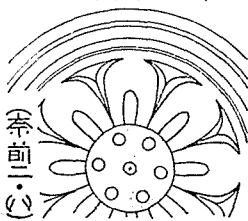
(奈前二)  
奈良・興福寺



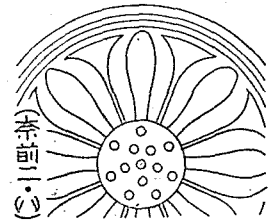
(奈前二)  
上野・上植木廢寺



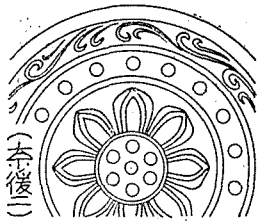
(奈前二)  
上野・上植木廢寺



(奈前二)  
尾張・報恩寺

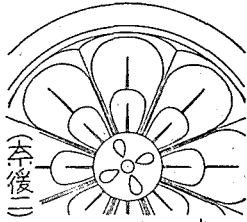


(奈前二)  
上野・上神主廢寺



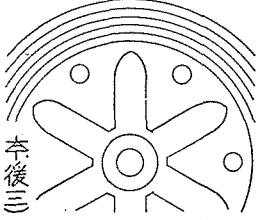
(本後二)

大和・額安寺



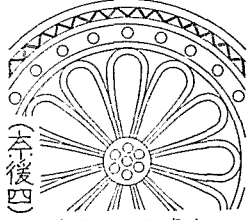
(本後二)

陸前・多賀城



(本後三)

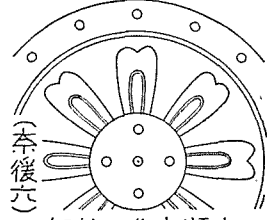
叡河・北野廢寺



(本後四)

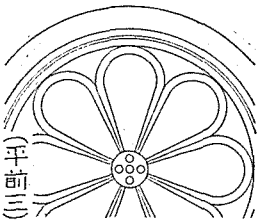
大和・平城宮

第●八●十●圖  
奈良平安時代  
單瓣蓮華紋  
疏凡十肆種  
不許複製 (四) 本頁中各



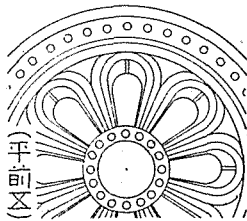
(本後六)

伊勢・逢鹿瀨寺



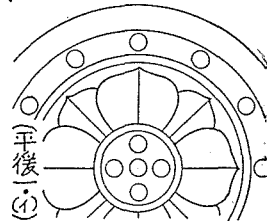
(平前三)

京都・法觀寺又重塔



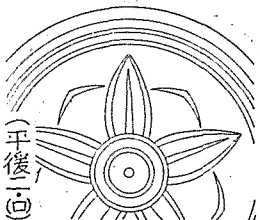
(平前四)

傳攝津・四天王寺



(平後一)

京都・平安宮(六勝寺)



(平後二)

上野・上植木廢寺



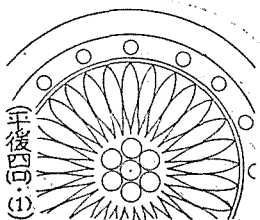
(平後三)

京都・六勝寺



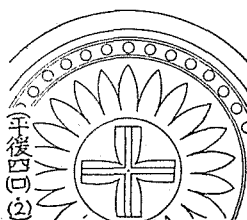
(平後四)

上野・兒島廢寺



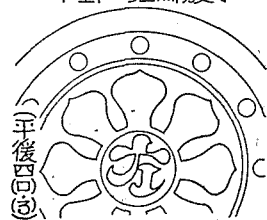
(平後四(一))

京都・大衆寺



(平後四(二))

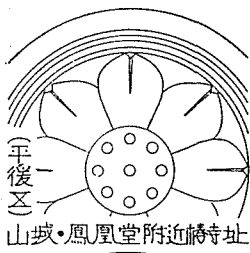
京都・六勝寺



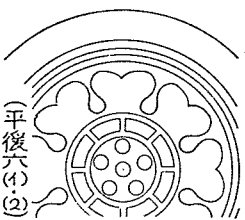
(平後四(三))

京都・平安宮(左寺)

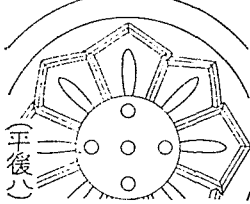
第八十壹圖  
 千文より短戸に至る  
 單瓣蓮華(菊)花紋  
 疏凡一十四種  
 不許複製 (列) 李晉十齋書



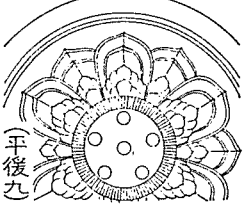
(平復一五)  
 山城・鳳凰堂附近橋寺址



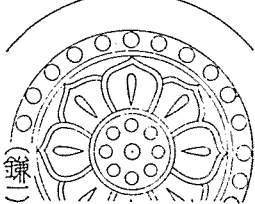
(平復六(二))  
 京都・六勝寺



(平復八)  
 山城・石清水八幡宮



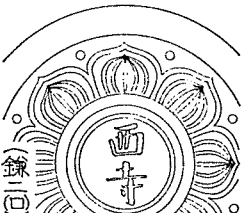
(平復九)  
 山城・鳳凰堂附近



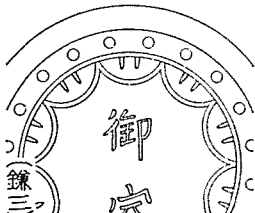
(鎌二)  
 京都・蓮花王院本堂



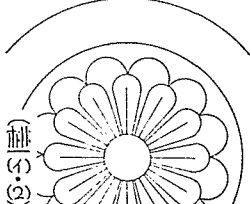
(鎌一四)  
 大和・法隆寺



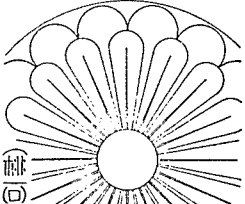
(鎌一四)  
 京都・西寺



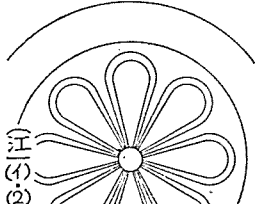
(鎌三)  
 京都・仁和寺



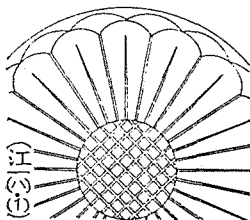
(鎌一六)  
 京都・阿彌陀峰



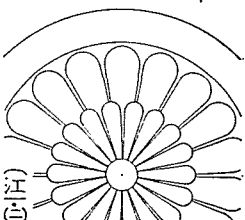
(鎌一四)  
 京都・阿彌陀峰



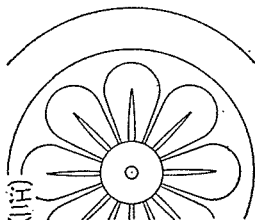
(江一四)  
 山城・石清水八幡宮



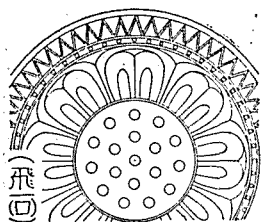
(江一五)  
 攝津・枚方附近



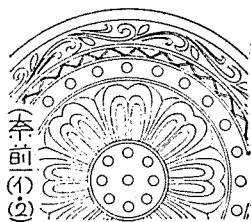
(江一六)  
 出所未詳(但山城)



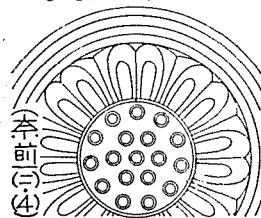
(江一三)  
 山城・石清水八幡宮



大和・中宮寺



大和・松尾寺

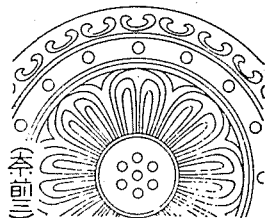


大和・石川寺

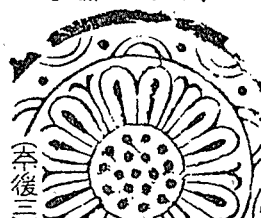


大和・紀寺(拓本より写す)

第八十貳圖  
飛鳥より鎌倉に至る  
復瓣蓮華紋  
疏凡十餘種  
不許複製 (丸) 本頁二十番



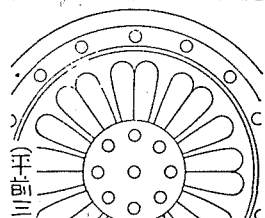
山城・綴巻郡三山木村峯



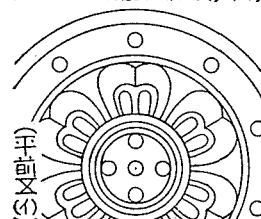
盟前宇佐・癡彌勒寺(複製)



大和・青木癡寺



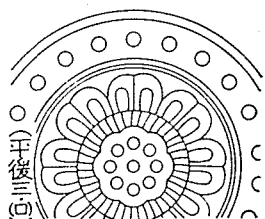
山城・平安宮



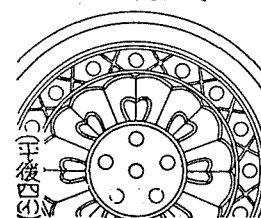
下總・國分寺



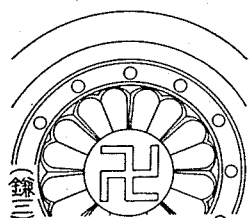
京都・聚樂廻附近



大和・唐招提寺



山城・鳳凰堂附近



山城・石清水い播磨

單瓣と復瓣との區別は、本文に書いて置いたが、其實甚だきめにくいのであつて、例へば此れ圖第四列左端の「幟」にさうらひにも差支ひのものもある。斯様ものは殊に平安時代に多く、中にはこれ以上にも随分あるから、それは例外例にせよ、或は適宜何れかに編入してよからう。

くなつて來るが、まづ當期は前代の情力でまだ中々上等のがある。

單瓣 (第八十圖)

一、瓣形杏仁の如くして珠紋帯あり、周縁無地 (河内二の宮神社)

二、瓣は卵形にして瓣上及び瓣間の隆起棍棒状をなす、珠紋帯なし (右同所田土)

三、子房特に小さく瓣は細長にして菊科植物の花の如し、珠紋帯なく周縁無地 (京都法親寺五重塔)

四、多瓣にして菊花の如く珠紋帯あり、周縁無地

- (イ) 子房内に七子を含む (平安宮?)
- (ロ) 子房内に一種の文様あり (平安宮)

五、子房は圓く隆起し (内に文字の如きものを認る。も臆臆として明らかならず)

其周圍即ち瓣との間に珠紋帯ありて雄藥を現はせるものゝ如く、瓣形また特殊なり、周縁にも珠紋帯あり (傳藤津四天王寺出土)

複瓣 (第八十一圖)

一、四瓣にして其外側に珠紋帯あり

- (イ) 子房内に五子を含み、周縁無地 (京都法親寺五重塔)
- (ロ) 子房はたゞ圓く隆起せるのみ、周縁の斜面に波紋あり (興福寺)

二、五瓣にして

- (イ) 周縁巾狭く一線を圍らせり (長岳寺五智堂)
- (ロ) 周縁巾廣く波線あり、波線の外に一線を巡らせり

(1) 波線の間文字なし (青木山)

(2) 波線の間「大工和仁部云云」の文字あり (右同所)

三、多瓣にして簡、珠紋帯あり周縁無地 (平安宮)

四、珠紋帯あり周縁無地、子房内に六實を含み中央に「栗」字を現はせり (平安宮)

五、子房の周圍に一線を巡らして雄藥を現はし珠紋帯あり周縁無地 (下總國分寺)



(ロ) 珠紋帯を缺き周縁の内側に一線を巡らす

(肥後國分寺)

六、周縁の内側に珠紋帯あるも、周縁は無地に

して珠紋帯との間に更に一線を巡らす(教王護國寺出)

土品三種

當期複瓣の例に四瓣・五瓣等のあるのは珍らしい事で、未だ嘗てなかつたのである。

平安時代後期、では蓮花紋にはいゝのもあるけれども先づ拙い方が多く、其代り出来たてのせいか巴紋に上等のがある、また寶相花紋にもいゝのがあり、中には蓮花紋としても寶相花紋としてもどつちでも差支ない様なものもある、だからつい蓮も寶相花も菊も原は一つだといつてみ度くなるのである。

單瓣(第八十、第八十一圖)。

一、四瓣にして珠紋帯あり

(イ) 瓣面に裝飾なく中央の縦線著し(平安宮)

(ロ) 瓣面に三葉模様を深く印せり(石清水八幡宮境内)

二、五瓣にして瓣形甚だ粗

(イ) 子房内に五子を含む(上野上植木廢寺)

(ロ) 子房は重圓紋より成る(上同)

三、各瓣は三重に切込みありて美麗に裝飾せられ、子房内には左廻りの巴紋を附す(出所不明ならず)

たゞ大和附近このみ知らる (京都六勝寺出土品を小川白楊氏著『古瓦譜』に載す)

四、瓣は單純にして其數六・八・多

(イ) 珠紋帯を缺き周縁無地

(1) 子房内に蓮實を含む(山城風堂附近・京都六勝寺・山城梶尾寺等)

(2) 子房内に顔面を附せり(下野兔島廢寺)

(ロ) 珠紋帯あり周縁無地

(1) 子房内に蓮實を含む(京都六勝寺數種・石清水八幡宮境内)

分類の上からは此れに屬するが、山城太秦寺出土のものは瓣數最多なるべく

二十九ある、だから各瓣は巾狭く兩端尖り、一見蓮とは見えぬ事、恰も醍醐

寺五重塔内初重入口の上方につけてある散し模様の内、中央の四つが蓮花であるのに、便化が劇しいので菊花の如く見ゆるのと同じである(第八十圖 左下参照)

(2) 子房内に十字形を印す、瓣は二十二

(京都六勝寺)

(3) 子房内に文字——「左」——を陽刻す。

『文様集成』には此れを平安宮瓦とし、小川白楊氏著『古瓦譜』には左寺瓦としてある。

(4) 各瓣内及び子房内に梵字を陽刻す——

胎藏界曼荼羅の中臺八葉院を現はせしも

(當麻寺)

五、八瓣なるも四は前に四は後に在り、瓣の遊

離端にV字形の刻と縦に凹線あり、周縁無地、

内側に二條線を巡らす(法隆寺南大門 山城椿寺址出土)

六、瓣形特殊にして濶大、遊離端は内方に茨を

作りて反轉の意を示し、周縁無地にして珠紋帯なし

(1) 子房と瓣との間に雄藥を現はす

(2) 瓣は陽刻せられ多數の雄藥あり(京都六勝寺)

(3) 瓣は陰刻せられ、雄藥は八本にして其位置瓣の中心線に一致す(同上)

(4) 子房と瓣との間に雄藥なし(同上)

(5) 八瓣にして珠紋帯あり、周縁に唐草文様を陽刻す(京都上賀茂神社)

八、八瓣にして末端角形をなす子房の周圍に

八個の劍頭紋を排列せしが如し(京都六勝寺・山城石清水八幡宮)

九、瓣面に更に花模様を置けるを以て瓣は最も美なり、子房の周圍に雄藥を現はし、周縁無

地(法隆寺・山城風凰堂附近)

右の他蓮花としても寶相花としてもいゝのがある

が、今は後者として取扱ふからこゝには省いておく。

複 瓣 (第八十)。

一、瓣は繊麗に過ぎ手法亦拙、珠紋帯あり周縁

無地(京都六勝寺・山城  
鳳凰堂附近出土)

二、子房内の蓮實に輪廓ある事奈良時代前期の

如し、子房の周圍に短き雄藥あり、珠紋帯あ

り周縁無地(京都聚樂  
廬附近)

三、子房の形特殊にして外擺線の集合の如く、

周圍に雄藥あり

(イ) 周縁無地(平安  
宮)

(ロ) 周縁巾廣く外に輪廓をとり、周縁上に珠

紋を配置せり(唐招提寺・鳳凰堂附  
近・六勝寺・平安宮)

四、周縁無地にして其内方に珠紋と斜十字とを

交互に現し

(イ) 瓣は密接し、其上に細線を以て瓣の隆起

を示せり(鳳凰堂  
附近)

(ロ) 子房は周邊に珠紋を置き、其内に右巻き

二つ巴を配せり(興福  
寺)

當代に限る様である。

六瓣のは奈良時代にもあつたが、四瓣五瓣等は

鎌倉時代、になると子房内に蓮實あるもの少な

く、多くは文字を記される様になつた、そして愈

々隆盛に趣き、墓股と同じ様に當代に於いて美事

の發達をなしたのである。蓮花紋の子房が退化し

て小圓形の隆起となり、十六の單瓣を有したのも

當代に出來た、最も甚だしいのは子房がない――

(どいつてもいゝ様な)――のもあつた。

單 瓣 (第八十)。

一、子房内に蓮實を含み瓣は輪廓の線より成り

瓣形また美ならず(京都蓮花王院本  
堂(二十三間堂))

二、子房内に文字あり

(イ) 珠紋帯あり周縁無地(法隆  
寺)

(ロ) 各瓣間に一個づゝの小球紋あり(京都  
西寺)

三、瓣は内擺線の集合の如く、内區に文字あり

(仁和寺) 文曰「御室」

四、子房退化して小點となり、十六瓣にして珠

紋帯あり、周縁無地(京都府久世郡宇治町出土)

此れ即ち菊花紋である、大概の菊花紋には

珠紋帯がないのは新しいからと思ふ。これ

は此の種の例では恐らく最も古いのではあ

るまいか。蓮花から菊花への變化がよく判

る面白い例である(第七十八圖第五段左より三)

複瓣(第八十圖)

一、子房著しく發達し、従て蓮實も大きく其内

に文字あり(東大寺・備中吉備津神社)

二、子房内及び蓮花紋の周圍に文字あり(東大寺戒壇院)

三、子房内に文字あり(東大寺東塔・石清水八幡宮・山城綾喜郡三山木村奥の堂出土)

室町時代 は巴全盛——(優良といふ意味では

なく最も流行したといふつもり)——であつて、

蓮は駄目になつて了つたのみならず、殆んど用ひ

られなかつたのか、實例も手元になく擧げる事が

出來ぬ、夫れなら菊花の例でもあればいゝが、疏瓦には生憎菊もない、だから殘念だが當代のはぬいておく事にする。

桃山時代

單瓣(第八十圖)

一、子房退化して小さく實を含まず

(イ) 細長なる十二瓣あり

(1) 周縁なし(山城伏見城)

(2) 周縁無地(京都阿彌陀峰)

(ロ) 十六瓣にして周縁なし(京都阿彌陀峰)

(ハ) 八瓣にして周縁無地(山城伏見城)

右は何れも菊花紋であるが、蓮も菊も同じだからこゝに記したのである。菊花紋に複瓣はない、

即ち蓮花紋は退化して菊花紋になると同時に何れ

も單瓣になつて了つたと言へるのである。

江戸時代

單瓣

一、子房退化して小さく實を含まず

(イ) 八瓣にして

(1) 周縁なし(紀伊和歌山城)

(2) 周縁無地(山城石清水八幡宮・同西芳寺等)

(ロ) 十二瓣にして周縁なし(近江小津神社)

(ハ) 十六瓣にして

(1) 周縁なし(河内牧方町附近)

(2) 周縁無地(大和圓城寺附近・同教弘寺)

(ニ) 十八瓣にして周縁無地(山城某神社)

二、子房退化して小さく、中心に一小點あり

(山城石清水八幡宮)

以上も前代と同じく何れも菊花紋で、其上單瓣のみである。殊に(ロ)の(1)の如きは純然たる寫生的の菊花になつてゐる。二の(イ)の(2)と同じものであるが、たゞ子房の中央に一小點がある丈けの差である、此の小點は蓮花時代に澤山にあつた蓮實の内、中央の一つが残つたもので、夫れもた

ゞ無意味に残つたもので、蓮實の痕跡 (Rudiment) である。

\* \* \* \* \*

明治になつては最早蓮花紋は殆んどない。海龍王寺講堂のは、八瓣の内四瓣が前に出てゐるが、其前へ出た瓣面に「海龍王寺」の四字を一つづゝ書いてゐる。此れは江戸か明治か下からみたゞけではよく判らぬが、いやに新しく見えるから多分明治であらう、江戸としても極く終りなことは確かだから、まあ明治としてもいゝのである。

併し確かに明治のは法隆寺塔頭の一の扉に並んでゐるので、即ち西院の方から東院へ向つて行くと右手の端の善住院のが夫れである。蓮花紋も拙だし、子房の中に「法皇教會」とかいてあるが、たゞかういふのがあるといふ丈けで、何れの點から見ても感心の出來ぬものである。